

協伸商会穀物レポート [KKR] Vol. 063

(2023/24年度 USDA米国農務省 10月12日発表)

[ハイライト]

① 世界の穀物需給は比較的安定し市場価格もロシア侵攻前に戻ったが、市場攪乱/不安要因にも注目必要

下記のコメントにもある通り、現状の世界の穀物需給は生産/消費量とも順調に拡大し28億ト（2000年18.5億ト⇒10億ト近く増加）、期末在庫率は06年17.0%から安全レベルの27.3%に回復、市場価格は昨年2月のロシアのUKR侵攻によって記録した市場最高値（小麦14.2/コーン8.3/大豆17.7ドル）から侵攻以前の価格まで戻り一見平穏に見える。しかし、一方では市場を一変させる、世界的な異常気象頻発/温暖化/港湾スト/物流混乱/各国の輸出禁輸措置/人口増/食肉需要増加等に注目が必要。

② ロシアの急速な小麦生産拡大/輸出増により同国の世界小麦市場での存在感高まる

ロシアの昨年度小麦生産/輸出数量は92/48百万トと史上最高を記録したが、今年度はそれが85/50百万トと生産量は幾分減少するが輸出量は5千万トに手が届く見通しである。この輸出量はEU/カナダ等を押さえて世界第一位、そのシェアは24%と極めて高い。今月号のKKR特集でロシアを取り上げているが、歴史的に見れば80年台には世界最大の穀物輸入国（85年45百万ト）だった同国の輸出大国への大転換と言える。また、生産組織再編と温暖化進行の中で更なる拡大可能性がある。

③ 小麦/コーンと対照的に価格高騰続ける「コメ」の動向に注目。インド等が輸出禁止措置を発動

コメの世界生産/貿易量は別添「需給表」の通り今年度518/52百万ト見込で、小麦等に比べその規模とエリアはアジアをベースにした極めて「ローカル」な品目であるが、今年に入りUKR不安による中東/アフリカ諸国や降雨不測のインドネシア等からの需要増により1月500ドル/トから8月650ドル/ト近辺まで徐々に価格を切り上げている。また、インドは7/20に非バスマティ米の輸出禁止や特殊米への輸出税賦課、9/1ミャンマーも輸出規制を発動。価格は現在611ドル/前年同期比135%と高騰。

1. 世界穀物需要の概要

① 生産量：	2,796百万ト（前年比1.8%	増 ↑、前月比0.2%	減 ↓）
② 消費量：	2,799百万ト（前年比0.9%	増 ↑、前月比0.2%	減 ↓）
③ 貿易量：	494百万ト（前年比0.6%	減 ↓、前月比0.2%	減 ↓）

2. 小 麦

① 生産量：	783百万ト（前年比0.8%	減 ↓、前月比0.5%	減 ↓）
② 消費量：	793百万ト（前年比0.2%	減 ↓、前月比0.4%	減 ↓）
③ 輸出量：	206百万ト（前年比6.9%	減 ↓、前月比0.5%	減 ↓）
⑤ 在庫量：	258百万ト（前年比3.5%	減 ↓、前月比0.2%	減 ↓） / （在庫率 33%）うち中国133百万ト、占有率51%
④ 価 格：	<u>\$5.68/Bu</u> （前年\$8.80/Bu / 前月\$5.68/Bu）と前月比\$0.00 横ばい。		
⑤ 概 況：	世界生産量は、前月比米国で増加したが、豪州/カザフ等で減少した為全体的には前月/前年比とも微減となった。消費量も飼料需要減少から微減。輸出量は前年比約15百万ト減少でも 2 億ト台を維持。価格は需給緩み低位安定で推移している。		

3. とうもろこし

① 生産量：	1,214百万ト（前年比5.1%	増 ↑、前月比0.0%	⇒ ↓）
② 消費量：	1,200百万ト（前年比2.8%	増 ↑、前月比0.0%	⇒ ↓）
③ 輸出量：	196百万ト（前年比8.4%	増 ↑、前月比0.0%	⇒ ↓）
④ 在庫量：	312百万ト（前年比4.8%	増 ↑、前月比0.5%	減 ↓） / （在庫率 26%）うち中国202百万ト、占有率65%
⑤ 価 格：	\$4.92/Bu（前年\$6.83/Bu / 前月\$4.65/Bu）と前月比\$0.27 上昇。		
⑥ 概 況：	世界生産量は、地域ごとに凸凹はあるが全体では前月比変わらず、前年比では約6千万ト増加し12億トの大体確保。消費量も前年比33百万ト増で順調。輸出量は前月から変動ないが前年比15百万ト増加する見込み。在庫量は生産量が消費量を上回る為3億トを超える見通しである。価格は生産順調なことから9月末に4 ㌔第半ばまで下げたが現在は5 ㌔近くまで戻している。		

4. 大 豆

① 生産量：	400百万ト（前年比7.9%	増 ↑、前月比0.5%	減 ↓）
② 消費量：	383百万ト（前年比5.4%	増 ↑、前月比0.2%	増 ↑）
③ 輸出量：	168百万ト（前年比1.5%	減 ↓、前月比0.1%	減 ↓）
④ 在庫量：	116百万ト（前年比13.5%	増 ↑、前月比3.0%	減 ↓） / （在庫率 30%）うちBRA38/ARG25百万ト
⑤ 価 格：	\$12.66/Bu （前年\$13.67/Bu / 前月\$13.56/Bu）と前月比\$0.90 下落。		
⑥ 概 況：	世界生産量は米国の単取引下げから前月比微減となったが前年比3千ト増の4億トを維持。消費量も前年より大きく増加し生産量ともに史上最高見通し。貿易量は中国が1億トに乗ったが前年比微減。価格は需給バランス緩和の結果12ドル台まで下落。		

世界の穀物・大豆等の需給

2023年10月12日
米国農務省発表： 単位 1 0 0 万トン

主要穀物世界の需給							
			生産量	総供給量	貿易量	総使用量	期末在庫量
全穀物	2020/21		2,799	3,593	514	2,800	793
	2021/22		2,748	3,541	497	2,774	767
	2022/23	9月	2,802	3,569	495	2,804	766
	2023/24	10月	2,796	3,563	494	2,799	764
小麦	2020/21		781	1,065	203	792	273
	2021/22		790	1,062	222	795	268
	2022/23	9月	787	1,054	207	796	259
	2023/24	10月	783	1,051	206	793	258
粗粒穀物 (とうもろこし等) 注1	2020/21		1,504	1,827	254	1,489	338
	2021/22		1,444	1,782	221	1,456	327
	2022/23	9月	1,497	1,825	235	1,485	340
	2023/24	10月	1,495	1,821	236	1,483	338
米	2020/21		514	702	57	519	183
	2021/22		514	696	55	523	173
	2022/23	9月	518	690	52	523	168
	2023/24	10月	518	691	52	524	167
大豆	2020/21		360	461	154	362	99
	2021/22		370	469	171	367	102
	2022/23	9月	401	504	168	383	122
	2023/24	10月	400	501	168	383	118

世界のとうもろこし需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	9月	299.47	1,214.29	187.12	1,199.77	196.19	313.99
	10月	298.13	1,214.47	186.92	1,200.20	196.25	312.40
アメリカ	9月	36.87	384.42	0.64	313.45	52.07	56.40
	10月	34.58	382.65	0.64	312.82	51.44	53.62
アルゼンチン	9月	1.11	54.00	0.01	13.60	40.50	1.01
	10月	1.11	55.00	0.01	14.10	41.00	1.01
ブラジル	9月	10.27	129.00	1.20	77.50	55.00	7.97
	10月	10.36	129.00	1.20	77.50	55.00	8.06
EU	9月	7.19	59.40	24.00	79.20	4.10	7.29
	10月	7.19	59.70	24.00	79.50	4.10	7.29
日本	9月	1.37	0.01	15.50	15.50	0.00	1.39
	10月	1.37	0.01	15.50	15.50	0.00	1.39
中国	9月	205.82	277.00	23.00	304.00	0.02	201.80
	10月	205.82	277.00	23.00	304.00	0.02	201.80
ロシア	9月	0.91	14.60	0.05	10.60	4.20	0.76
	10月	0.91	14.60	0.05	10.60	4.20	0.76
ウクライナ	9月	1.41	28.00	0.02	5.50	19.50	4.43
	10月	2.41	28.00	0.02	5.50	19.50	5.43

世界の大豆需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	9月	102.99	401.33	165.97	382.62	168.42	119.25
	10月	101.89	399.50	165.75	383.28	168.24	115.62
アメリカ	9月	6.81	112.84	0.82	65.76	48.72	5.99
	10月	7.30	111.70	0.82	66.08	47.76	5.98
アルゼンチン	9月	17.60	48.00	5.70	41.75	4.60	24.95
	10月	17.50	48.00	5.70	41.75	4.60	24.85
ブラジル	9月	31.95	163.00	0.45	59.70	97.00	38.70
	10月	31.45	163.00	0.45	59.70	97.50	37.70
中国	9月	37.80	20.50	100.00	119.00	0.10	39.20
	10月	36.80	20.50	100.00	120.00	0.10	37.20
EU	9月	1.53	3.05	13.80	16.59	0.30	1.49
	10月	1.43	3.05	13.80	16.59	0.30	1.39

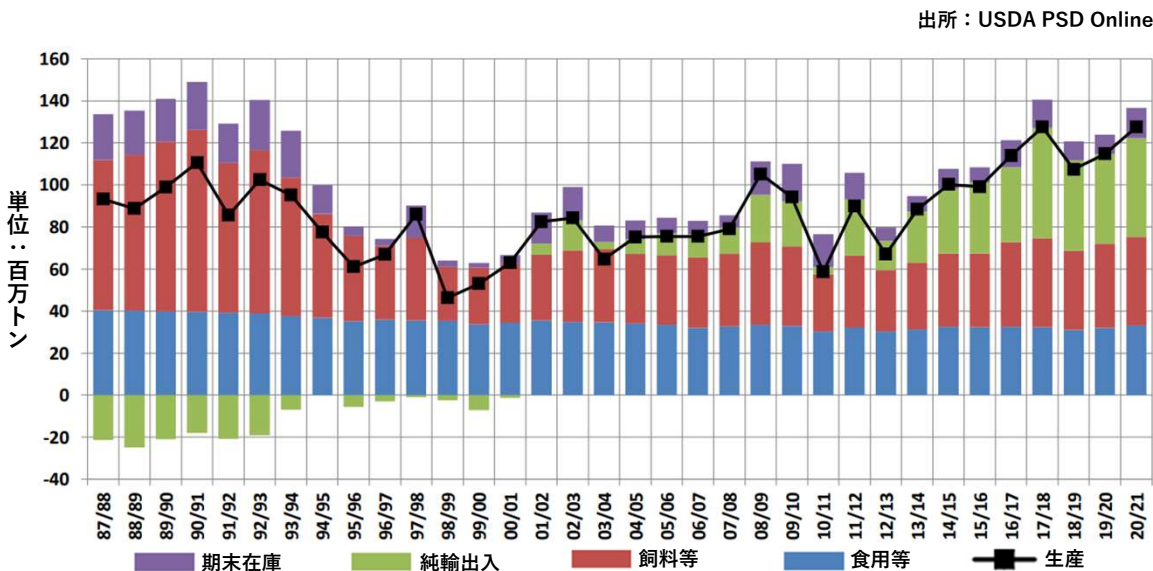
世界の小麦需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	9月	267.13	787.34	205.62	795.86	207.34	258.61
	10月	267.55	783.43	204.63	792.86	206.26	258.13
アメリカ	9月	15.79	47.20	3.54	30.73	19.05	16.75
	10月	15.83	49.31	3.67	31.54	19.05	18.22
アルゼンチン	9月	3.43	16.50	0.00	6.55	11.50	1.88
	10月	3.43	16.50	0.00	6.55	11.50	1.88
オーストラリア	9月	2.84	26.00	0.20	7.20	19.00	2.84
	10月	2.84	24.50	0.20	7.20	17.50	2.84
カナダ	9月	3.58	31.00	0.60	8.70	23.00	3.48
	10月	3.66	31.00	0.60	8.70	23.00	3.56
EU	9月	16.45	134.00	7.50	108.50	37.50	11.95
	10月	16.51	134.00	7.50	108.50	37.50	12.01
中国	9月	138.82	137.00	11.00	153.00	0.90	132.92
	10月	138.82	137.00	11.00	153.00	0.90	132.92
インド	9月	9.50	113.50	0.10	108.10	1.00	14.00
	10月	9.50	113.50	0.10	108.10	1.00	14.00
ロシア	9月	16.14	85.00	0.30	42.00	49.00	10.44
	10月	14.64	85.00	0.30	41.00	50.00	8.94
ウクライナ	9月	1.33	22.50	0.08	8.80	11.00	4.11
	10月	1.30	22.50	0.08	8.80	11.00	4.08

脚注1：粗粒穀物はとうもろこし、マイロ、大麦、燕麦、ライ麦等の計で約80%がとうもろこしである。
脚注2：年度は穀物年度。地域・作物により異なる。例：アメリカ産とうもろこし、大豆：9月～8月。

世界主要国の農業と穀物需給の行方…ロシア(1)

- ❶ 先月までは、インドの食糧需給状況と今後の穀物輸入拡大可能性等について述べたが、今月からは供給サイドとして、世界の穀物市場において存在感が急速に高まっているロシアを取り上げたい。ロシアの昨年度小麦生産量は、92百万トで中国/EU/インドに次いで世界第4位、輸出量は48百万トと世界2位の豪州を引き離し世界第一となり世界輸出シェアは21%まで高めている。歴史的に見れば[表1]に見る通り1980年代(旧ソ連末期)から1990年代初頭までのロシアは恒常的な小麦/コーン等の穀物輸入大国(80年代年平均3,000万ト、最大4,500万ト/1985年)であり世界の穀物需給動向を左右する最大の波乱要因となっていた。それに比べれば2015年以降のロシア穀物生産/輸出拡大の現状は隔世の感がある。
- ❷ 1990年代後半までロシアが穀物輸入大国だった理由の一つは、[表1]に見る様に穀物生産量を上回る大量の飼料需要である。具体的には、同期間の食用需要は4千万ト前後で推移しているが、飼料需要は倍以上の最大9千万ト(90年)近くまで急増。この要因は食肉需要の拡大と併せ、畜産生産の「飼料要求率」が極めて高いことにある。具体的には90年のコルホーズに於ける豚の飼料要求率は何と6.9！(1kgの体重を増やすのに6.9kgの飼料投与)、家禽肉3.6という信じがたい数字である。因みに日本に於ける同要求率は豚3.5/家禽肉2.0前後…。これは恐らく、ソ連末期の経済停滞/社会混乱の中で畜舎/飼養管理/配合飼料設計等の技術/資材不足によるものと想定できる。[表2]に見るようにソ連解体(1991年)後、食肉生産は1千万トから半減の約5百万トンまで劇的に減少し同時に飼料需要も激減した為、穀物生産/需要量もピークの1.2億ト(90年)から半減の6千万ト(00年)前後まで急激に縮小した。
- ❸ その後、ロシアの食肉生産量は2000年代に入り社会的混乱の鎮静化/経済回復/畜産振興策/生産構造改革等により[表2]に見る通り00年420万ト⇒20年には2.6倍の1,100万ト強まで拡大し、自給率も50%弱から80%近くまで急激に回復。一方、穀物生産/需給動向は[表1]に戻ると食肉生産回復と連動し00年65百万トン⇒20年1.2億トまでほぼ倍増！ほぼソ連崩壊前のレベルまで回復した。その内訳で見ると食用35/飼料用40/輸出45百万ト。特に特徴的なのは80-90年代までの穀物大量輸入依存から生産組織改革/飼料要求率改善(15年⇒豚3.3/家禽肉2.1)等から輸出余力が顕在化し、2015年以降世界有数の穀物輸出大国に変貌した点である。
- ❹ この2000年以降のロシアの穀物/食肉生産急拡大は、ソ連解体後実施された諸政策、特に以下2点の農業生産組織再編の効果が大きい。具体的には①農業生産主体は、従来のコルホーズ/ソホーズから市場経済導入で民営化した大規模な「農業組織」、コルホーズ等の民営化過程で独立した農家の「農民経営」、農村住民が自宅周辺で自給する為の「住民経営」の3本に再編。全農用地(1.4億ha)の2016年所有割合は順番に63.2/27.7/8.5%。経営体数は27,500件/115,600件/2,350万戸。1戸当たり農用地面積は2,910/310/0.5haと圧倒的に「農業組織」のウエートが高く、ここを中核に生産財投入/固定資本投資が行われ穀物生産拡大が実現。② また同時に、外部資本による「農業組織」の買収/グループ化により大規模なインテグレートされた企業グループある「アグロホールディング」を形成。特に畜産分野では「チェルキーゾヴォ」等上位10社の食肉生産量415万ト、全国1,120万トのシェア37%と圧倒的。土地保有は「ミラトルク」等上位10社合計550万haと10社だけで日本の全耕地面積を上回っている。(続く)

【表1】 ロシアの穀物需給の推移



【表2】 ロシアの食肉・肉製品需給構造の変化

